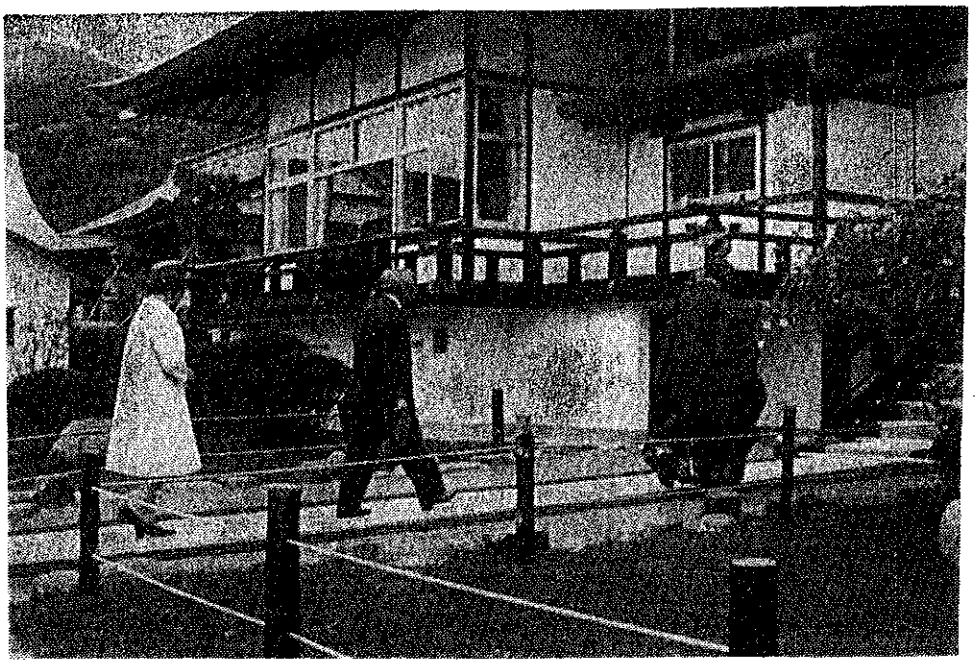
鵜戸

発行者兼編集者
鵜戸神宮
社務所
印刷所
西日本印刷



―昭和四十八年四月、参拝の折、休舎へむかわれる両陛下―

天皇陛下御即位五十年をお祝いして

宮司　長友安美

天皇陛下には、本年ご即位満五十年の御賀を迎えさせられ寔に慶祝至極に存じ上げます。

社報「鵜戸」は諸般の事情によりまして一時発刊を中断して居りましたが、本年は昨年の両陛下ご結婚満五十年に次ぐ歴代史上例をみないご即位五十年の慶賀すべき御年に当りますのを機会に、社報「鵜戸」を再度皆様方のお手許にお届けする事の出来ますのは欣快この上もないところであります。

天皇陛下の御事蹟につきましては、斯界唯一の広報紙であります「神社新報」をはじめ、各お社の社誌社報にも縷々申述べられて居るところでありまして、小職の敢て申上ぐるところではありませんが、二千数百年の永きに亘るご皇室と天皇さまを中心に独自の文化と伝統を築き、且つ引継いで参りました民族・国家は世界に例をみないことは、ご承知の通りであります。

特に昭和四十八年十月執り行われました第六十回神宮式年遷宮に際し寄せられました全国津々浦々からの多大なるご奉賛の誠は、これに異を唱え、且つ煽動する勢力にも恐懼の念を抱かしめたのでありまして、古代ローマ帝国、あるいはギリシャ帝国が偉大なる帝王の死後は単なる文化遺産として、又世界史の一ページとしてのみ現代の人々に認識せられている事とは雲泥の感を強くするものでありますこの事は皇室、天皇陛下のご存在が二千数百年の間私共の生活の実感として、又祖先からの血の伝承として受継ぎ引継がれている事の証左でもあります。

話は遡りますが、昭和史の上で私共の一番銘記すべきは終戦時に於ける陛下の偉大なるご聖断であります。この事は戦後随分と詳しい現代史の研究が公刊されましたが、陛下がいつでも終始平和を切望なさって居られた事は内外の研究者の等しく認めて居る処でありまして、ご自身の生命をも顧みられぬあの偉大なるご聖断なくして日本民族の今日は到底あり得なかった事は、明々白々の事実であります。

昭和二十年九月二十七日の天皇陛下と占領軍司令官マッカーサー元帥との会見の模様が、朝日新聞連載の「マッカーサー回想録」に出て居ります。「私は国民が戦争遂行にあたって政治軍事両面で行ったすべての決定と行動に対する全責任を負う者として、私自身とあなたの代表する諸国の裁決にゆだねるためおたづねした。」と天皇様が仰言られた。これに対して元帥は、「私は大きい感動にゆさぶられた。死をともなうほどの責任、それも知り尽している諸事実に照し合せて明らかに天皇の責任に帰すべきではない責任を引き受けようとするこの勇気にみちた態度は、私の骨のズイまでもゆり動かした。私はその瞬間私の目の前にいる天皇が個人の資格においても、日本の最上の紳士である事を感じとったのである。天皇は私が話し合った殆どの日本人よりも民主的な考えをしっかり身につけていた。」

又陛下の側近に侍した木戸内大臣の日記には「陛下はいよいよ最後の秋には祖宗の神器を奉じて信州の山中で神器と運命を共にせねばならないか」と、悲壮なご決心をなさってその準備についてお話になっている事が記されて居ります。

その他天皇さまの御事蹟につきましては枚挙にいとまがありませんが、天皇さまのご治世を貫くものは、実に「敬神愛民」の一語に尽ると存ずるものであります。

今上陛下ご即位五十年の佳年に際し、世界に冠たるご皇室をいただく私共はより一層天皇さまの大御心を体し奉り、大和一致世のため人のために奉仕し、国家民族の隆昌と世界の共存共栄とを請い願うものであります

社報「鵜戸」の復刊に当り、紙上より天皇陛下ご即位五十年を衷心よりお祝い申上げると共に、竹の園生の弥栄を祈念するものであります。

「鵜戸」の復刊にあたりて

権宮司　佐藤美春

鵜戸さんの社報「鵜戸」を社務所復興の間休刊していましたところ、休みがそのまま続いて、はや五年の歳月が流れてしまい、今更乍ら月日のたつのが早い事に驚いております。

ここに天皇陛下御即位遊ばされて今年五十年の吉き年を迎え鵜戸さんでは四月二十九日天長祭の吉き日に奉祝大祭を奉仕いたしました。そしてこのご即位五十年の記念すべき事業として楼門を造るべく工事を起しております。そして又これを契機に社報を復刊する事にいたしました。

この社報を休んでおりまして皆様にお便りが出来なかった五年の間に鵜戸さんの様子が大変かわりました。四十五年の春以来お詣りにならない方は其の変り様にびっくりなさる事でございましょう。

四十五年の春、新しい社務所を茅葺の社務所の南に造らんと計画して、材木の切込みを終り、柱を立て始めようとしていた七月十日の夜、約二百五十年経ているともいわれていた文化財的な茅葺書院造の社務所が惜しくも焼失してしまい、まことに申し訳のない事でございました。

その年の十一月、かねて工事を進めておりました今の社務所が出来上り、焼失いたしました茅葺の社務所の跡には茅葺とは打って変った、鉄筋コンクリート、屋根の部分が木造銅板葺で朱塗りの荘厳なる儀式殿を造り、同時、務所前の第三鳥居を撤去して、ここに昔の仁王門に代る御門、左大臣、右大臣を安置する朱塗りの御神門（ごしんもん）を造りました。これが四十七年の十一月完成し、境内の面目を一新いたしました。

有難い事にはこの儀式殿の出来ました翌年の四十八年四月十一日畏くも天皇皇后両陛下の御参拝を仰ぎました。まことに鵜戸さん御創建以来の目出度い大慶事でございました。

両陛下には儀式殿に一旦御休憩の後、親しく御参拝、更に儀式殿に御休憩遊ばされました。この日、日南市飫肥の人等が奉平踊を御覧に入れようと張り切ってお待ちいたしておりましたのですが、御参拝の頃からあいにくの大雨となり、踊は中止となり御覧に入れる事が出来ず残念でしたが、両陛下には御気嫌いと麗しく御還幸になりました職員は勿論、役員総代、関係者一同恐懼感激まさに鵜戸さんの歴史の尊い一頁となりました。

この両陛下の御休憩いただきました儀式殿には、鵜戸さん大権現当時の古い御霊代をお祀りいたしております。ここでは儀式殿という其の名の様に、大祭には直会（なおらい）の式をいたし、常には結婚式場として氏子崇敬者の結婚式を奉仕しており、皇祖発祥の聖地鵜戸さんでの挙式をこよなく喜んで戴いております。

先にも申しましたが、本年は天皇陛下御即位五十年の目出度い年でありますので皇紀二千六百三十五年にちなみ、二千六百三十五体の記念御守を謹製して四月二十九日の天長祭に御参拝の二千六百三十五人の方にお上げいたし奉祝いたしました。更にこの御即位五十年を記念して儀式殿前の第二鳥居の位置に工費一億円をかけて、床面積五五、三三平方米二階建で高さ十一米の鉄筋コンクリート造り銅板葺、朱塗りの楼門を建設すべく、四月九日に地鎮祭をいたし床堀り、基礎固めも終り只今は鉄筋組み、コンクリートの枠作り、カンナの音、槌の音、資材を運ぶトラックの出入りも繁く着々工事が進んでおります。やがて十一月には速日の峰のお山の緑に映える朱塗りの荘大なる楼門の偉容を見る事が出来ましょう。

これ偏えに御神徳のしからしむるところでありますが、又皆様の心からなる御崇敬の誠によることと感謝いたしております

昭和四十五年には十五人であり　た職員も今は三十人を数え、いよいよ覚悟を新たに御神徳の発揚に微力いたしております。

ここに社報「鵜戸」の復刊にあたり、皆様の御崇敬の誠に感謝し、皆様の御健勝と御多幸をお祈り申し上げ、一言御挨拶といたします。

思うことみなつきねとて
麻の葉をきりにきりても
祓ひつるかな

みな月の
なごしの祓いする人は
千歳の命のふと云ふなり

宮川の清き流れに
禊せば祈れることの
叶はぬはなし

休刊中のできごと

昭和四十五年七月～五十年五月

昭和四十五年七月の火災のために社報「鵜戸」も第四号をもって休刊して現在に至ったが、今度天皇陛下御即位五十年を奉祝して復刊することになった。

本紙（第五号）は、昭和四十五年より現在に至るまでの休刊中の造営工事、天皇皇后両陛下ご参拝等のできごとを特集してみることにする。

新社務所、社号標の御造営

昭和四十五年、七月十日夜半二百四十年の歴史を誇る書院風の由緒ある社務所を焼失した事はまことに残念且つ申訳のない事であったが、旧社務所は老朽化と屋根葺替え用の茅等の保存が困難なために新社務所造営の矢先であったことは既報の通りである。

宮司以下職員一同は仮社務所で事務を執る一方、奉賛会の皆様方の熱誠溢れるご尽力により新社務所建設が鋭意進められ同年十一月に完成をみた次第である。

―新社務所―

新社務所は海を見渡す参道より一段高い速日峰の麓に建設され、木造平屋建て銅板葺き延べ四七八・九八八平方メートル、流れ造りの屋根を呈し落着きを加え、唐破風の玄関が一段と風格を加えている。

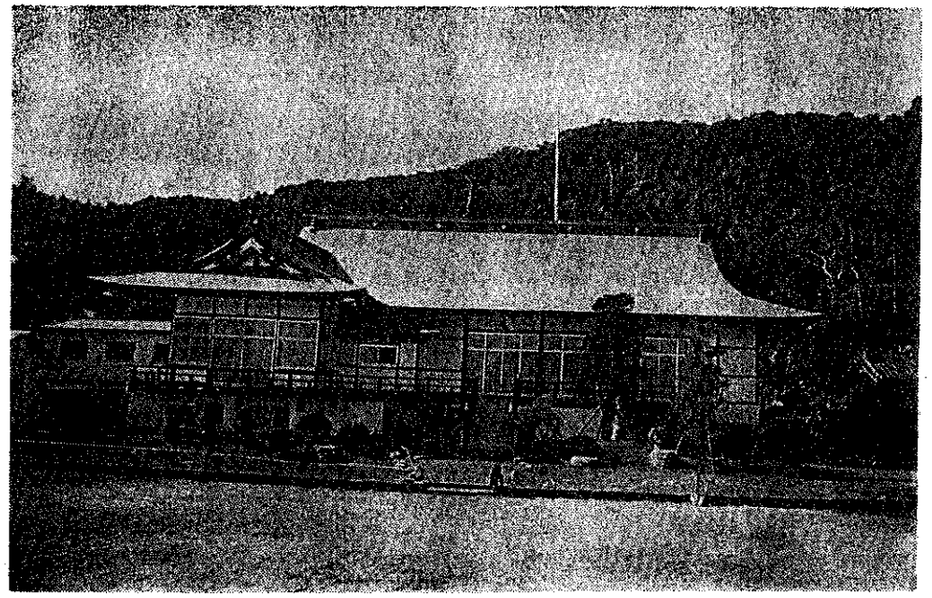
○　○

新社務所の建設と同時に上の駐車場寄りの八丁坂上がり口に御影石造りの高さ四メートルの社号標が伊勢神宮の徳川宗敬大宮司の揮毫による「鵜戸神宮」の文字も鮮やかに建立されたのである。

儀式殿、御神門の御造営

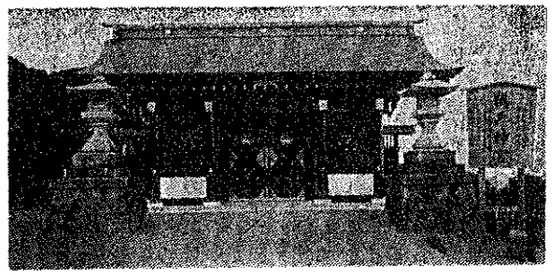
昭和四十七年、四月予てからの念願であった儀式殿、御神門のご造営に着手し、約七ヵ月間の日数を費して同年十一月十七日完成、翌十八日新装成った同儀式殿において役員顧問、崇敬者等約二百名参列の下盛大な奉祝の行事が執り行われたのである。

儀式殿は焼失した社務所の跡に建設され、鉄筋銅板葺きで廻りに華麗な朱塗りの高欄がとりつけられ、背後の速日峰（御祭神の御陵墓参考地）の自然の緑に映えて一段と荘厳さを増している。地上一階、地下一階の延べ七百八十三平方メートルで、一階は神殿、大広間、献幣使室、応接室など、地下は調理室、斎食室、倉庫などとなっている。



―完成した儀式殿―

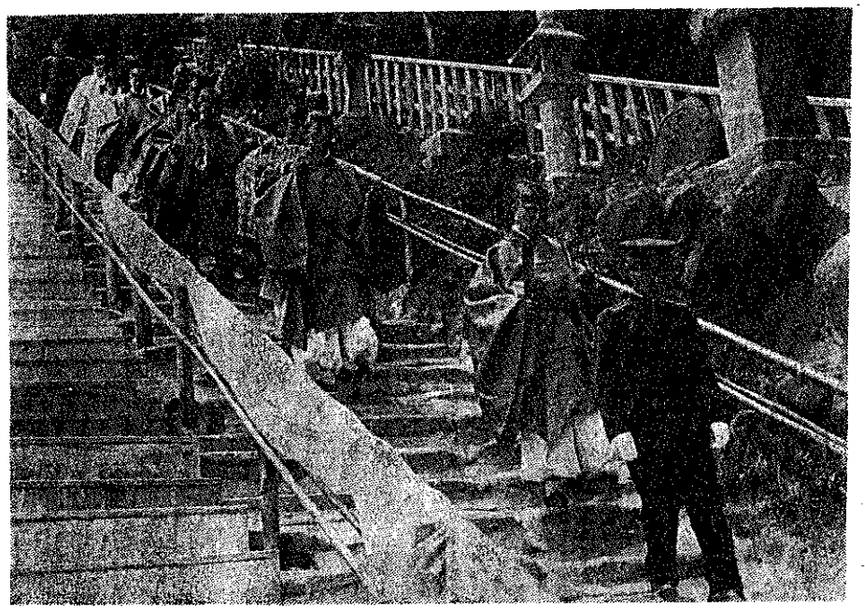
御神門は社務所前の参道（第三鳥居跡）に建設され、鉄筋コンクリート三十三平方メートルで銅板葺き流造りで扉に菊の大紋章をつけ、中に左大臣、右大臣の随神を奉安している。



―御神門―

―自動車御祓所―

天皇皇后両陛下御参拝



―天皇皇后両陛下御参拝奉告臨時大祭―

昭和四十八年、四月宮崎県小林市夷守台で行われた第二十回全国植樹祭に御臨席になられた天皇皇后両陛下には、宮崎県各地をご巡幸のかたわら四月十一日午前十一時当神宮をご参拝なされた。当日は、当宮役員、総代等関係者が参道に立ち並びお迎えする中、両陛下おそろいでお着きになり、ご参拝なされた。この日はあいにくの天候ではあったが、ご参拝の後、長友宮司が境内をご案内申し上げ、ご祭神ゆかりのお乳岩、亀石、運玉等をご覧遊ばされた。

当神宮に天皇陛下のご参拝を仰ぐことは御創建以来初めての大慶事であり、宮司を初め職員一同誠心誠意ご奉仕申し上げた

その後両陛下には、儀式殿にて一旦ご休憩遊ばされて、職員、役員、総代等がお見送り、万歳奉唱のうちに、ご還幸になった。

なお当神宮では、両陛下が皇居をご出発の前日「行幸啓御安泰祈願祭」を、また当日には「天皇皇后両陛下御参拝奉告臨時大祭」（写真は幣帛料を先頭に本殿に向う祭員）をそれぞれご奉仕申し上げた。

自動車祓所御造営

十一月全国至る所で交通事故が増加している折から、当神宮では毎日全国津々浦々より訪れる参拝者の交通事故防止の為、自動車祓所を新設した。

御造営は四十八年十一月より四十九年四月までの約五ヵ月間を費やし、社殿は銅板葺き流造り六十平方メートルの広さをもち、中央前面に神座があり、社殿横には自動洗車機が取り付けられ、お祓いを受ける前に車を洗車するようになっている。

祓所新設より現在まで宮崎、日南、串間各市を初め、鹿児島県や関東、関西方面からも新婚旅行の途中交通安全の祈願、新車のお祓いを受けた人々は、約八百件に達しており、この自動洗車機付きのお祓所は大変な好評を博している。

天皇陛下御即位五十年記念事業楼門御造営

昭和五十年、本年は時あたかも第百二十四代今上天皇陛下の御即位五十年の記念すべき佳年にあたり、全國の神社ではそれぞれ奉祝の記念行事あるいは事業が実施されている折から当神宮においても役員会の決定に従い約二百四十年前、寛永年間に建立された仁王門が明治維新の際の廃仏毀釈運動によって焼失したため、天皇陛下御即位五十年記念事業としてその復興に着手することになった。

去る四月九日、宮司以下職員奉仕の下、盛大な起工式が執り行われた。

今回造営の楼門は鉄筋コンクリート銅板葺き流造り、屋根の一部は木造とし、銅板は三、五～四トンを必要とする。地上より約十一メートルの高さで一階は五五・三三平方メートル、二階は二五・五五平方メートルの広さで、現在の門守神社は二階へ遷座されることになっている

楼門の袖から袖までは約十・四六メートルあり、中の御門は間口三・二メートル両脇門はそれぞれ二・一メートルでここに菊の大紋章を御神門と同様とりつけ、全体は朱塗りで二階には高欄をとりつける。

設計監理は湯浅重雄氏（儀式殿・御神門と同様）で工事は西松建設株式会社九州支店が請負って、御造営工事は現在着々と進行している。なお竣工は十一月十五日の予定である。

―起工式―

例大祭斎行

昭和五十年二月一日

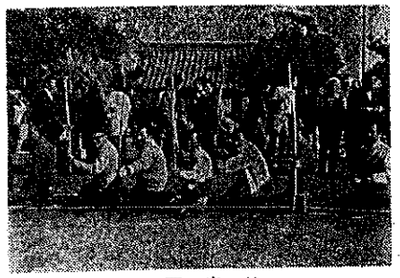
当神宮例大祭は二月一日午前十一時より神社本庁より、献幣使 杉田清氏（県神社庁副庁長）を迎え、責任役員、氏子、崇敬者各総代。英彦山神宮、鹿児島神宮、霧島神宮、照国神社、松原神社、都農神社、青島神社各宮司、敬神婦人会、官公衙代表等約百名が参列して厳かに斎行された。

また祭典中には当神宮の特別崇敬者で日頃信仰の厚い東京在住の花柳孝栄さんが「鶴の舞」を、京都吉村流地謡舞家元の吉村雄輝さんが「玉取の舞」をそれぞれ奉納された。

また一方例大祭の奉納行事である剣道大会は、日曜日に当る二月九日の午前八時より剣法発祥鵜戸山顕彰会の主催により開催された。同大会には県内全域より一五六チーム（一〇九二名）と個人一〇四人（女子）が参加し試合は少年、中学、高校、一般の四ブロックに分かれて終日技を競った結果、一般では児湯支所、高校では宮崎中央高、中学では三股中、少年の部では修道館がそれぞれ優勝、特に中学の部の三股中は本大会四連勝をなし遂げた。

―剣道大会―

一方毎年例祭当日奉納の日南市郡四半的大会は、当日雨のため十一日の紀元節に行われた。大会には百チーム約四百人が参加し午前九時より儀式殿前の庭上で焼酎を飲み、弁当を広げながら賑やかに進められた。四半的とは今から約四百五十年位前飫肥藩の伊東氏（五万三千石）と薩摩藩の島津氏との戦いの際武器を持たない農民が手製の弓矢（四尺五寸の長矢、四尺五寸の弓）で防戦したのに始まったと言われ、現在では焼酎を飲みながら四間半の距離より四寸五分の的を射る農民娯楽となっている。



―四半的―

鵜戸神宮に奉仕して

巫子見習　松浦三恵子

二月十六日、初めて私が胸踊らせて、白衣、袴を身につけた日である。早いものでもう五月も末、鵜戸神宮に勤めるようになって三カ月半ばかりになる。最初の頃は誰もがそうであるように何もわからずにただオロオロするばかりで至らない事ばかりだった。未だに先天的な不器用さを持つ私は思うように出来ない事ばかりで、自分の失敗に自分であきれる時さえあるのにはまったくまいってしまう。

朝六時過き、母に名前を呼ばれて眠りたりない気持で起きる。食事を済ませて家を出るのは七時が十分前、バス停までは時計を見ながら歩いたり走ったり、バスに乗り込んで座席を確保するとまた少し眠気が出て来てひと眠り、でも神宮に着いて白衣、袴を身につける時には眠気もどこかへ行ってしまう。そして、相変らず満足にいかない仕事を少しでも人並みにやりたいと思いながら、人並みに出来ず仕事を終えてしまう。そんな私がどうにかやっていけるのは、回りの人達のおかげである。

厳しく注意されるたびに、今度こそは二度とこんな失敗はする、まいと思うのだが、似たような失敗をすると注意して下さった人に申し訳なくて仕方がない。仕事の時は厳しくても、皆仕事を離れると優しくておもしろくていい人ばかりである。

少し話がはずれるが、近所の人達や友達のお母さんに「どこにお勤め？」と聞かれて「鵜戸神宮です。」と答えると、決まって「いい所にお勤めですね。」と言われる。神宮の目の前は雄大な太平洋だし、空気は澄みきっているし、環境が良い土に神様に仕えているからよくそう言われるのだろう。

私が初めて神宮に来た日、宮司さんから「身体に気をつけて結婚するまで奉仕するつもりで頑張るように。」と仰っていただいたが、「結婚するまで……」というような事になると、私は一生神宮に勤めなければならないような気がしてならない。とにかく、早く先輩職員に負けないように精進するつもりです。神宮の皆さんこれからもよろしくお願いします。

しばらくはまだまだご迷惑をおかけしそうです。

社務日誌抄

昭和五十年

一月十二・十五・十九日、大分鉄道管理局、田渡博司氏他一、二六〇名参拝

二月一日、例大祭、宮司以下職員奉仕

二月九日、奉納剣道大会（剣法発祥鵜戸山顕彰会主催）

二月十一日、奉納日南市郡四半的大会

広島東洋カープ監督（ジョー・ルーツ氏）他五十三名必勝祈願祭

二月十七日、祈年祭、宮司以下職員奉仕

三月四日、大西輝雄氏他七名正式参拝

三月六日、職員例会

三月十六日、皇学館高等学校校長津下正章他二四一名参拝

三月二十日、氏子総代会（駐場車増設の件）

三月三十一日、楼門工事入札、西松建設株式会社九州支店に落札

東京渋谷山王清浄講社、助川収蔵氏以下七十名正式参拝

四月五日、宮司、鹿児島松原神社例祭参列の為鹿児島へ出向

四月九日、楼門工事起工式、権宮司以下職員奉仕、参列、宮司、責任役員、工事関係者

四月十日、楼門工事作業小屋建設始まる

四月十五日、鳥居撤去、門守神社仮遷座祭

四月二十日、東京伍千会・中村太一氏他三百名正式参拝

四月二十二日、役員会（昭和四十九年度一般会計歳入歳出決算承認の件）

四月二十九日、天長祭（天皇陛下御即位五十年奉祝臨時大祭）宮司以下職員奉仕

責任役員総代等八十名が参列、井戸川役員の先導で天皇陛下聖寿万歳を三唱した

四月三十一日、宮崎県神道青年会総会、祢宜、三輪、黒木権祢宜出席

五月六日、御衣祭、宮司以下職員奉仕

五月九～十一日、九州地区連合神職大会並びに神道青年九州地区総会につき宮司以下三名出席（於熊本県）

五月十七日別当宮司先賢慰霊祭（宮司以下職員、願成就寺、伊勢木住職奉仕）

五月二十三日、東京大森、川島家邸内社例祭奉仕、宮司祢宜、河野斎女奉仕

五月二十五日、大阪市老人クラブ連合会理事、榎本進一郎氏他百十五名正式参拝

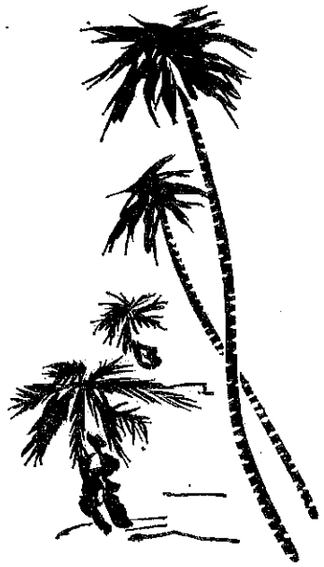
五月二十八日宮内庁書陵部桃山監区所長西田博氏他二名来宮

六月二日、夏祭り打合せのため、権宮司・祢宜・本部権祢宜油津漁協へ出向

六月三日、愛媛県総鎮守八幡神社宮司、清家貞雄氏他四十九名正式参拝

六月七日、速川神社宮司、川越還氏他三十七名正式参拝

六月十一～十四日、研修旅行第一班出発（伊勢―熊野三山）



職員異動 (1)

四五、六、一　権祢宜に任ずる　増川久利
八、五　守衛を命ずる　宮本米作
〃　〃　横内守
〃　〃　長友恒三
九、五　巫子を命ずる　郷原ミツ子
〃　願いに依り本職を免ずる　川畑八重子
一〇、一　事務を嘱託する　佐藤文子
一一、一五　願いに依り其の職を解く　長友恒三
一二、一　〃　井上和代
一二、一五　守衛を命ずる　松浦被義
四六、一、一二　社内権祢宜を命ずる　河原忠孝
一、二七　権祢宜に任ずる　香取辰夫
四、一　巫子を命ずる　福田晴代
七、一　願いに依り其の職を解く　斎女長友温子
八、一　〃　郷原ミツ子
八、二〇　出仕を命ずる　中村勝利
九、二〇　巫子を命ずる　泉照美
一〇、一　願いに依り其の職を解く　石坂定人
一一、二　斎女を命ずる　小玉さよ子
一一、九　願いに依り其の職を解く　川瀬順子
一二、二五　巫子見習を命ずる　水元洋子
四七、一、二五　願いに依り其の職を解く　和田美子
二、五　巫子見習を命ずる　佐藤文子
二、一六　願いに依り其の職を解く　小玉房代
二、二〇　巫子見習を命ずる　河野慶子
三、一　〃　長谷川潤子
三、五　守衛を命ずる　土屋益仙
三、一〇　巫子見習を命ずる　藤井幸子
四、一　〃　
四、四　願いに依り其の職を解く　福田晴代
四七、五、一〇　巫子を命ずる　垂水洋子
八、一　〃　和田美子
〃　〃　小玉房代
〃　〃　河野慶子
〃　〃　長谷川潤子
〃　〃　藤井幸子
九、五　長崎県神社庁に出向を命ず　河原忠孝
一一、五　巫子を命ずる　井手上ノリ子
一二、一　社内権祢宜を命ずる　佐藤東
〃　〃　中村勝利
四八、三、三　願いにより其の職を解く　和田美子
〃　〃　長谷川潤子
三、一二　巫子見習を命ずる　築地和香子
四、二七　願いに依り其の職を解く　〃
五、一　掃除婦を命ずる　宮本ツヤ子
〃　〃　小玉ケサミ
〃　〃　育田礼子
〃　〃　水元イチ子
五、二二　巫子を命ずる　川瀬美喜子
七、二八　其の職を解く　井手上ノリ子
一二、一　守衛を命ずる　水口行光
四九、二、一二　出仕を命ずる　谷口正史
二、二八　願いに依り其の職を解く　中村勝利
三、二〇　願いに依り其の職を解く　藤井幸子
〃　願いに依り本職を免ずる　山口萬里
四、一　社内権祢宜を命ずる　本部雅裕
〃　巫子見習を命ずる　土屋真知子
四、二九　斎女を命ずる　前園昭子
九、一九　権宮司に任ずる　泉照美
佐藤美春

（以下次号）

鵜戸山散歩(1)

―亀石、運玉―

全国津々浦々より、南九州に訪れる人々の目に最後まで焼きついて離れない観光地は、日南海岸、中でも特に鵜戸神宮であるそうである。

私達が社頭に奉仕していて、参拝者に一番多く問われる事は「この洞窟は自然のままですか」ということである。初めてお詣りされる方にとって、この洞窟はなんとも納得がいかない代物らしい。ご参考までにと思い、洞窟内は約一反歩、高さが八米半あります、と説明するとまたびっくりされ、ますます自然に出来たものではなくて、ブルドーザーでも入れて堀ったのだろうというように疑いの念を深くされる。

このような参拝者の方でも神前でお詣りを済ませ、岩屋内を本殿に沿って一周、お乳岩、お乳水をご覧になり、岩屋前の日向灘にそそり立つ二柱岩、特に亀の形をした亀石(枡形岩)を見られると、自然に出来たものか、否か、人間技ではとうてい出来ることではない事に気づかれ、その疑念は晴れるようである。

今紙上でご紹介するのは、この霊石の亀石である。本殿前面の海岸には、この亀石を始め、御船岩、二柱岩、扇岩、夫婦岩などの奇巌怪礁が聳り立っているが、このうち一番人気のある(といっては失礼だが)、信仰の厚いのは亀石である。

そもそも霊石亀石は、当神宮の御祭神鵜草葺不合尊の御母上豊玉姫の命がお子様をお産みになる際、竜宮よりお乗りになって来られた亀であると伝えられているものである。亀石の背中には枡型の穴があり、以前はそれに向ってお賽銭を投げ祈願をしたそうであるが、現在は「運玉」という、粘土を丸くこね「運」と印をおし、軽く焼いたものを参拝者は投げ、諸祈願をされるのである。見事、枡型にはいるとお願い事がかなえられるという。

亀石に向って投げる運玉は、地元の鵜戸小学校(来住正俊校長、生徒数九十六名)が昭和二十九年から、精神薄弱児の収容施設つよし学園(森敏樹園長、生徒数七十名)が昭和四十三年から謹製、納めている。

以下紹介する文は小学校五年生の運玉作りの感想文である。小学校を卒業した人等にとっての思い出は、先生と一緒にどろんこになって作った運玉や、正月運玉授与を奉仕した事だという。写真はその折の小学生の奉仕風景であるが、このような正月の奉仕や、運玉作りを通して小学生達は鵜戸さんの氏子としての意識を深くしているようである。

今日も氏子によって謹製された運玉は、新婚さん達のいろいろなお願い事をかなえんと、亀石の背中に向って飛びかっている。

(本)

―運玉奉仕の小学生―

運玉

鵜戸小五年　黒木恵加

鵜戸神宮に、ご参ばいなさるとお岩屋の手前に、「運玉」というのを売っています。

運玉というのは、「幸運の玉」という意味です。これを買って下の海岸にある、かめの形をした大きな岩のてっぺんのくぼみに投げ入れると、幸運がおとずれるというものです。だから、お客さんたちには、とっても人気があり、喜ばれているものです。

この運玉を実さいに作っているのは、私たち鵜戸小学校の児童とつよし学園の児童たちです。入学以来運玉作りにはげんできています。校庭のねん土を丸めて、〃運〃の印をおし、さらにかわかしてから焼き上げて作るのです。

このようにして、でき上った、「運玉」がご参ばいのお客さんの手にわたり、楽しまれています。

お年よりも、わかい人も、子供たちも、新とんさんたちも、ほとんどみんなの人が、買い求めて、わいわいはやしたてながら投げ合っています。

うまく命中して歓声を上げ手をにぎり合って喜んでいる人、はずれて残念そうに「もういっちょ」とねらいを定めて投げこんでいる人。その玉の行方にみんなの目がそそがれます。そんなふうして遊んでいる様子は、ほんとうになごやかなものです。

女の人は右手でいいのですが、男の人は左手で投げる約束になっていますので、不自由な左手の投げ方で、大きなわらいがおこるような場面もあります。こうして成功しても、失敗しても、にこにこ顔で運玉の話をしながら帰って行かれます。たぶん、家に帰り着かれてからも、「運玉」が家庭での楽しい話題になることでしょう。

わたしたちの作る「運玉」がお客さんたちみんなの、幸運の玉になりますように祈りたいと思います。

編集後記

「鵜戸」復刊号をお届けします。復刊号はこの五年間(休刊中)の主なでき事を知らせるように、特に今回は天皇陛下御即位五十年を奉祝して特集号と致しました。

また作製には再出発の意味もこめて構成・装丁も前号に比べ、できる限りすっきり鮮明に打ち出すように心掛けて復刊号に尽力しましたが、まだまだ不十分な点が多く、皆様の御指導を賜りたくお願い申し上げます。

向暑の砌皆様方のご健勝祈り居ります。